

---

# とある鈴谷の自然操作（ナチュラルオペレーター）

上琴病 レベル5

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある鈴谷の自然操作ナチュラルオペレーター

### 【Nコード】

N1869Z

### 【作者名】

上琴病 レベル5

### 【あらすじ】

学園都市

東京都西部を開拓して作られた能力者の街、約200万人の学生達が住み日々その能力を向上させる為に切磋琢磨している……

恐らくこんな基本設定は分かっている人達ばかりだよね、これを読んでくれている方々は。

そんな街に住んでいる学生の1人に幻想殺し（イメージブレイカー）

を宿している上条建設一級フラグ建築士こと上条当麻がいる……まあ、ご存知だと思いますけど。

この物語はその上条さんの親友（という設定の）ゆきかぜすすや雪風鈴谷が主人公となります。

まあ、こんな文才の無さが分かっってしまうあらすじを読んでそれでも進んでくれる方はどうぞちょっとした暇潰しに読んでいって下さい。

プロローグ 7月17日(夜) (前書き)

【読むにあたって】

- 1 ・オリ主です
- 2 ・連載は超不定期です
- 3 ・作者は禁書については友人から借りて原作13巻まで読みました。
- 4 ・禁書のアニメは一樣1期、2期ともみました。
- 5 ・超電磁砲については原作のマンガは全巻買って読みました。
- 6 ・超電磁砲のアニメは全話見ました。
- 7 ・作者は禁書では御坂美琴が好きです。
- 8 ・超電磁砲は佐天涙子が好きです。
- 9 ・作者は上琴病患者です。

以上を踏まえた上でお読みしていただきたいと思います。

## プロローグ 7月17日(夜)

学園都市というところはまったく面白いところで様々な学生が生活している。

能力を磨き上げレベル5まで上がった者

レベル5目指し日々自らの能力を磨く者

学園都市に来たが能力が発現せずレベル0のままの者

壁にぶつかり諦めスキルアウトに落ちて行く者等々様々な学生がいる。

そんな色々な学生の住む学園都市の街角を今1人の学生が歩いている。

「はあ、ようやく説教から解放された……」

この学生がこの物語の主人公となる雪風鈴谷である。

クラスメイトからは、上条さん、土御門、青髪ピアスとひっくるめて四天王と呼ばれている。

その鈴谷がこんな時間まで説教を受けていた理由は……

「何で人を助けたのに毎回説教受けないといけないんだよ……」

とまあこのように風紀委員ですら無いのに能力を使って人助けをしたからである。

学園都市では能力を授業など以外で使用するのが禁じられているのだが、この鈴谷は毎回それを無視して能力を使って人助けをしている。

まあ、能力を使わなくても風紀委員ではない学生が人助けをしたら説教をうけることになってしまっただが……

「ホント納得出来ないなあれは……」

「はあはあ不幸だあ〜!!」

「ん？この声は……」

このセリフ、皆さんはもうお分かりですね。

「やっぱり当麻だったか……」

「あ、鈴谷か助けてくれ!!」

我らが主人公上条さんの登場です。

「……また『ビリビリ』か？」

「ああ！頼む助けてくれ!!」

「あ、居た!!待ちなさい!!」

声のした方を見ると常盤台中学の制服を着た学生がこっちに向かって走って来ていた。

「このまま、お前をあの『ビリビリ』に引き渡すのも面白そうだな……」

「んなこと言わないでくれよ！上条さんからのお願いだよ！」

「はあ、まあ仕方ねえ……ついて来い撒くぞ！」

「おお！…！」

「あ、こら逃げるな！！待ちなさい」

鈴谷と上条さんは御坂を撒く為に裏道に入って行った。

「はあ、ようやく撒けた……」

「『ビリビリ』って奴結構執念深いなお前に対して……」

「それだけ目の敵にされてるってことですよ」

「いや、お前こと好きだから執念深く追っかけてくるんだらうよ…」

…)

「はあ、一級フラグ建築士が……」

「ん？なんか言ったか？」

「何でもねーよ」

「そうか？」

(ビリビリって奴が哀れに思えてきた……こんな奴の事好きになっちまって)

そんな事を思っているうちにマンションの自分の部屋の前に来たようだった。

「んじゃまた明日なあ〜」

「おう、今日は上条さんはゆっくりと寝られそうです」

(何でもこいつこんなにモテるんだよね……)

そう思いながら部屋に入った7月17日の夜のお話し。

ブログ 7月17日(夜) (後書き)

前に連載してやつのネタに詰まって消してこれをアップしました。

7月18日（放課後）

「はい、じゃあ今日はこれでおしまいですう」

「「「ありがとうございます」」」

一刻も帰りたいたい衝動を抑えて聞いていた小萌先生（名前の通り小さくて萌える：青髪ピアス談）の話が終わったと同時に俺は机から鞆を引ったくと教室から走り出した。

「「逃がすか!」」

が、その俺を土御門と青髪ピアスが追ってくる、その

理由とは……

「だから俺はロリコンじゃねえって言ってるだろ!」

「いや、鈴やんは絶対ロリコンだにや」

「さあ、来るんや鈴やんこちらの世界へ!」

……こんな状態になってしまっている理由は数時間前に遡る。

一時間目が終わった後の休みに暇だったので当麻を合わせ4人で、好きな女性のタイプを話し合うことになった。

そして俺がタイプを言う番となり

「俺は年上の姉さん女房タイプか清楚な巫女さんが好きだな」

つと言ったら土御門と青髪ピアスが

「ええ！！それはうそだにやあ〜」

「鈴ちゃん……本当の事を言うんや！お前はロリコンや！……」

「……いや、ロリコンじゃねえよ……」

とまあ何故かロリコン認定されて、その後俺がロリコンかロリコンじゃないかをその後全ての休みを使って話し合ったがまとまらなかった。

このままじゃあの2人絶対徹夜で俺に追及してくる、俺は夜が弱いから寝ぼけて肯定してしまったら俺は明日からロリコンになってしまう。

ということでは俺は逃げることにしたのである。

が、さらにもう一つ俺を止めようとする影があった。

「今日こそ逃がさないわよ雪風！」

ふきよせいらい  
吹寄制理典型的な仕切り屋タイプの女、当麻のフラグ建築が唯一効かない奴で俺みたいなのが嫌いなようだ、ちなみにめっちゃ巨乳。

「今日も逃げてやるぜ吹寄！」

「ふん、言ってなさい……デリヤー」

言っな否や吹寄は俺に回し蹴りを食らわしてきた。

どうやら吹寄は武術の心得があるようで、形にハマった見事な回し蹴りだった。

「が、甘い甘いぞ吹寄えええ!!」

俺は回し蹴りを避けると同時に体勢を落としてから空きになった足の下にスライディングをかけた……すると

「ニヤッ」

吹寄が不適に笑った。

そして

「かかったわね!!」

「なっ!?!」

吹寄は回し蹴りをちょうど俺の脇腹の手前の上で止めるとそのままかかと落としにシフトチェンジしたのである。

「ふふふ、死になさい!!」

「くっ、こうなれば奥の手だ！！秘技下着御手！！！」スカートアップ

スカートアップ  
下着御手……学園都市都市伝説の一つ、学園都市に住むとある女子学生が使うと言われている技、使う人使われた人両方とも大切な何かを失うらしい。

「きゃあああああああ」

「ではさらばだ吹寄」

下着御手によってスカートが上がって下に着る物が見えてしまった吹寄が怯んだ隙に俺は教室から駆け出した。

「雪風……殺スー！！」

……後ろでめちやくちやく殺意の籠もった声が聞こえたが俺は空耳としておく事にした。

「……あつ、待つんだにゃー鈴やん」

「……そうや！待つんや鈴やん」

ガシッ

「「えっ!?!」」

「雪風は明日処分するとして……今はあんたら2人だあ!!」

「「にゃー!?!」」

……ちなみにこれは後から聞いた話だが、この一部始終を見ていた担任小萌先生は

「雪風ちゃん是指導のしがいがあるのですう」

「楽しそうに言わないで下さいよ……」

と当麻に突っ込まれていたという

「ふう、ここまでこれば良いだろ……」

後ろを見てみると吹寄おるか土御門も青髪ピアスも付いて来ていなかった。

「まあ、結構裏道使ったから土地勘無いと絶対ついて来れないからな……しかし」

暑い、そりや当たり前だただでさえ夏で暑いのにここまで全力疾走して来たのだから暑くないわけがない。

「どっか涼める所は……ん、『Seventh mist』? 思い切り女物の洋服屋だけど、もうここで良いか……」

少し迷ったが、まばらに男性客（恐らく彼女の付き添いだろう）が見えたし、飲食店も何店が入っているようなので何気なく中に入った。

入ってみるとやっぱりほとんどの客が女性だった。

「……………くっ、リア充め！」

男性客のほとんどが彼女連れって、非リアにはキツいぜ……

そんな感じにリア充に悪態を尽きつつ俺は意味もなくぶらついていてた。

「あれ？雪風さんじゃないですか」

「ん？」

女性の水着コーナーを通った時、唐突に俺を呼ぶ声がした。

声の方を見てみると

「……………初春か、昨日振り」

声の主は風紀委員の初春飾利だった。

「誰？知り合い？」

隣を見ると初春と同じ制服を着た美少女が立っていた。

「ほら、よく言ってる風紀委員の仕事増やす厄介な人ですよ」

「うん、思い出したけど、本人を前にそれを言うんだ……」

「……代弁ありがとう、えっと」

「あ、佐天涙子です。初春の友達やってまーす」

「どうも佐天さん、ちなみに俺の名前は雪風鈴谷ね」

「雪風さんですか……よろしくお願いします。あ、お近づきのしるしに携帯の連絡先交換して良いですか？」

「おお、良いぜ断るわけない」

こんな美少女の連絡先交換に躊躇するわけがない。

「どーもです」

「そついえばどうして雪風さんはこんな所に？」

「ん？暑かったから涼みにね……んじゃ、あんまり友達との買い物邪魔しちや悪いしじゃあな」

「はい、風紀委員の仕事以外だつたらあゝ」

顔は笑つてたが（いわゆる営業スマイル）、後ろから黒いオーラが溢れ出していた。

「まあ……頑張るよ」

多分無理なのだが、俺はそうしか言えなかった、だって怖いもんあれ……あ、涼しい筈なのに汗出てきた。俺は足早にその場を去った。

俺が去つた後

「面白い人だね雪風さん」

「風紀委員じゃなかったら私もそう言えるんですけどね……」

「相当苦労したようで……でも雪風鈴谷さんか、今度ゆっくり話  
してみたいな……」

そんな会話があつた事を俺は知らなかつた。

「そろそろ帰るかな……」

「お、鈴谷じゃねえか」

「ん？何だ当麻か……」

今度は当麻と会つた。

「何だとは失礼だな……まあそれは良いけど、お前ツインテールの  
小さい女の子見なかつたか？」

「ツインテールの女の子？見てないな……って小さな女の子!？」

「ああ、小さな女の子」

「まさか……ロリコン!？」

「ちげーよ、洋服屋案内してって言われたから案内したんだよ」

「まあ、そうしておいてやる……手伝ってやるうか？」

「ああ頼む」

「はいよ」

暇だったし手伝う事にした。

当麻曰わくこの階からは離れていないはずという事だった。

で探していたら

「何で誰も居なくなってるの？」

気付いたら誰も居なくなっていた、そういえば何か騒がしく放送していた気がするけど。

そついや最近虚空爆破事件ってよく聞くけどなんだっけ？

「確か……重力子を加速させて爆破させるんだっけ？」

爆破威力が上がって行ってるらしいから、そろそろ死者が出てもおかしく無いんだっけ？

「まさかそれがここに？そんなまさか……」

「逃げて下さい！！あれが爆弾ですっ！！！！」

そつ初春の声が聞こえたかと思うとほんの10m手前に明らかにおかしい物が転がって来ていた。

ですよね〜そついう展開ですよね〜ここは

「そんな事言ってる場合じゃねえよ！！！！」

俺は全力で走った。

すると横に服の倉庫があるのが見えた。

「後は神様頼んだあゝ」

瞬発的に決断すると倉庫に向かって走った、そして

ドン

俺が倉庫に滑り込むと同時に爆発した。

ガラガラ

「けほけほ、どうやら生きてるみたいだな俺……」

どうやら俺は悪運が強いようで、あんな爆発だったのに奇跡的に無傷だった。

「まさか、こんなところでダ　ハードみたいな事する羽目になるとは……世の中分らないもんだな本当」

周りを見てみると見事に色々な物が吹き飛び散乱していた、まあ当たり前前の事だが……

「あゝあ、こりゃひどいもんだぜ……よく無傷だったな俺」

初春達が居た方に目を移してみると、あっちの方も無傷のようだった、そのまま合流しようかと思っただが

「ちょっと待てよ……今俺がここに居るって本当はいけない事だな、つまり風紀委員の厄介になる……逃げよ」

風紀委員の厄介になることに気付いたので（せめて3日ぐらいは初春に会いたくないので）、見付からないように帰った（もとい逃げた）。

「何で2日連続で疲れた状態での帰宅なんだよ……」

愚痴を言っても意味が無いとは分かっているが、やっぱりつい愚痴は出てしまっただって人間なもの。

7月18日（放課後）（後書き）

とりあえず作ったので載せておきます。

ゆきがせすすち  
雪風鈴谷

CV：木村良平

年齢… 16

性別… 男

身長… 175cm

体重… 65?

能力… ナチュラルオペレーター自然操作

レベル… 4

当麻と同じ学校に通っている高校生。

当麻とはお隣さんで中学校時代から仲がいい。

当麻と同じく色んなものに頭を突っ込むクセがあるので風紀委員などによく怒られている、そのため黒子や初春とは面識がある。

能力者としてはとても優秀であり、また武術も達人的な強さを誇る。とある理由により魔術勢力の人間をとても恨んでいる。

基本的は温厚だがいざ戦闘となると冷徹に戦闘に特化した思考回路になる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1869z/>

---

とある鈴谷の自然操作（ナチュラルオペレーター）

2011年12月29日17時48分発行